

2021年度 ソニー幼児教育支援プログラム
「科学する心を育てる」

これまで × ICT = 新しい教育保育

～大切にしてきた教育保育を軸に、ICTを掛け合わせたことで広がり深まった新しい形～



芦屋市立打出保育所

目次

- I はじめに 1
- II 子どもの「科学する心」の芽生えを捉え、育むために 1
- III 実践報告
 - 4 歳児「ICTでつながる
～芦屋市立保育所・こども園でのリモート交流～」..... 2
 - 5 歳児「ICTでふかまる
～消防署見学がICT教育保育に発展し、うまれたもの～」..... 12
- IV 「科学する心」の育ちと今後の可能性 19

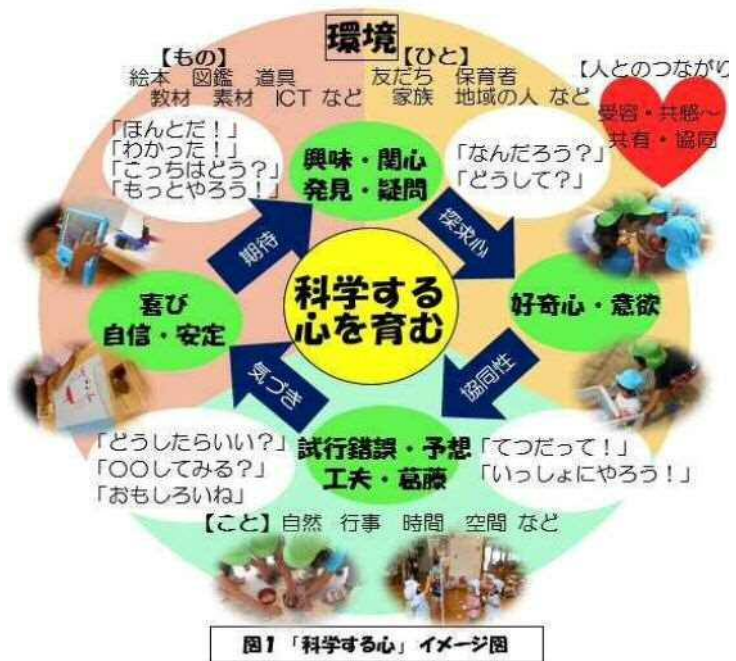


I はじめに

本園では『“いのち”を大切に、生きる力の基礎を育む』を教育保育理念におき、継続した保育実践の中で「人とのつながり・関わり」、「実体験」の大切さを職員間で共有し、教育保育を行っている。保育所保育指針改定後、就学前期の子どもたちの育ちにおいて「自律的に行動する力」、「多様な人間関係を構築する力」、「知識・技能を活用する力」の3つの力の重要性を学んだ。昨年度は特に『教育保育の環境』としてのICT機器の活用を取り入れた。技術の習得のみならず、人とのつながりの深まり、表現の幅を広げるためのICT機器の活用を通して、子どもたちの心が動く瞬間に寄り添い、育むということを学んだ。しかし、子どもたちの心の動きの読み取りやその後の援助方法など、疑問点や不十分さが残った。「科学する心を育てる」ことへのさらなる理解と学びに取り組んでいきたいと願い、今年度も「子どもたちの心が動く瞬間とは?」「科学する心とは?」を日々の保育の中で問い、環境作りや記録等を生かしながら子どもたちの心の読み取りを丁寧に行ってきた。本市では、令和3年度から小・中学校において1人1台のタブレット導入など、ICT環境の実現へ向けて取り組んでいる。子どもたちが生きていくこれからの時代にICTの活用が不可欠であることは、就学前の子どもたちと関わる私たち保育者も認識しておくべきことである。子どもたちの育つ姿に見通しを持ち、保育計画を立てる上でもICT活動を取り入れながら、子どもたちの「科学する心」がどのように育ち、人とのかかわりの中で深まっていくのかを学んでいく。

II 子どもの「科学する心」の芽生えを捉え、育むために

私たちは、子どもたちの「科学する心」の芽生えやその時生まれるつぶやき、周りの世界との繋がりについて話し合い、図式化した。(図1) 心が動く時(科学する心が芽生える時)の多くは子どもたちの主体的な活動の中から生まれる。そのような瞬間を見逃してはいないか、保育者主導の方向に促していないかを改めて振り返った。遊びや生活の様々な場面での「科学する心」を理解し、子どもたちの思いを受け止め、環境作り等に取り組む中で、保育者も環境の一部として子どもたちを客観的に見守り、子どもたちの心を読み取っていくことにした。一人一人の子どもたちが主体的な活動の中で何に興味を持ち、探求心を深めていくのか、喜びや達成感を得られる瞬間等を見逃さず捉え、共感・援助し次の活動に繋げていくこと、豊かな感性や創造力を伸ばしていくことが「科学する心」を育てていくことだと考えた。



【今年度の取り組み】

年間計画や毎日の教育保育の中でICTの取り入れ方を試行錯誤していた4月、兵庫県では新型コロナウイルス感染防止による緊急事態宣言のため、登園自粛を要請した特別保育が約1か月半続く。その間、家庭と保育所を繋ぐことはできないかと考え、動画・写真・閲覧サービスを利用する。タブレットを使って所内の様子や遊び、絵本の読み聞かせなどを撮影・配信することで、画像を見ていた子どもたちが通常保育再開後も泣かずに登所できるなど、子どもや家庭と繋がり続けることができた。その後も定期的に配信を続け、生活様式の変更や子どもたちの様子を実際の映像を通して伝えることで、感染防止のため施設内(室内)に入ることができない保護者の不安を和らげることに繋がった。

通常保育が再開されると、常に生活・教育保育の中で“子どもたちの心が動いてどんなこと?” “これが科学するってこと?”と職員間で振り返るようになり、子どもたちがどんな時・事柄に惹きつけられ、気づきや挑戦を繰り返しながら探求心を深めていくのかに視点が向けられた。また、ICT教育保育の振り返りとして、一人一人の子どもたちの姿やつぶやきをエピソード記録(日誌)やドキュメンテーション等、記録に残すことにも意識が強まってきた。しかし、取り組んでいく中で新たな疑問点や課題も生まれた。

- ICTの活動を他の教育保育へどのように繋げればよいか?(実体験とICTの連動性)
- 機器をアプリ以外の方法で利用できないか?
- 友だちや人との関わりツールとしての使い方とは?(年齢・発達に合った使い方とは)
- ICTを利用した教育保育の展開により、今まで気づけなかった子どもたちの心の動きを更に読み取りたい

保育者が機器（タブレット・プロジェクター等）を扱う経験が増したことで、使用の幅が徐々に広がる。子どもからの疑問やもっと知りたいという新たな気持ちの芽生えに対し、知識・情報を取り入れるツールとしても活用するようになった。また、日常生活が制限される中で、コミュニケーションツールとしても活用した。今回は4歳児（ふじ組23名）、5歳児（きく組22名）の姿を通して「科学する心」の芽生えや育ちの様子を、ICTを活用した教育保育の中で見出していくことにした。私たちが常に大切にしている“子どもの生活の土台は実体験である”ということ踏まえながら、ICTの活用の背景には必ず子どもの活動（実体験）があり、子どもたちの主体的な生活の中での気づき、疑問、探求、感動に寄り添い、心を読み取りながら、その中で必要になるツールとしてICTを取り入れ、その後の活動（実体験）にも繋げていくよう、取り組んでいく。

Ⅲ 実践報告

ICTでつながる 4歳児 ～芦屋市立保育所・こども園でのリモート交流～

担任自身、ICT教育保育について、昨年度の取り組みからICTを1つの教材として活用することで新たな可能性が広がるかもしれないと感じたが、幼児期の子どもたちにICTというツールは本当に必要なのかという迷いや葛藤は消し切れていなかった。これからの時代を生きていく子どもたちに必要だということとは理解できるが、保育所という子どもたちの集団の生活の中では、画面に向かうことよりも実際に見て触れて感じるという本物の経験・体験を重ねてほしい。家庭ではできないダイナミックな経験や、集団ならではの人と人との関わり合いやぶつかり合いを重ねて、人間が生きていく上で必要なスキルの基礎・土台となる感情や意欲の芽生えである“人間としての根っこ”をつくりたい…と、考えていた。

このような想いと葛藤があった中で、新型コロナウイルス感染症により世界が未曾有の危機に晒された。これまでの当たり前が当たり前でなくなり、4月の初めての緊急事態宣言により、人と人との交流が遮断された。それは、私たち大人にとっても辛い日々だった。私生活でも制限を余儀なくされる中、友人とリモートで繋がるという手段が、そのような心の辛さを少し和らげてくれる気がした。保育所に通う子どもたちも同じではないか、と考えるようになった。従来であれば、芦屋市内の他の施設の子どもたち同士、互いの施設に行き来して園庭で遊び、公園で待ち合わせをして交流する機会も持っていた。それが難しい今、ICTを活用した教育保育の実践としてリモート交流ができないかと、この取り組みを計画した。

『会ってみたい』『リモート交流って楽しい！でも、やっぱりほんとに会いたいわ…』
第1回 リモート交流 ～はじめての“つながる”体験を通して～

① 「会ってみたい！」「どうして会えないの？」じゃあ、どうする？（7月17日）

緊急事態宣言が解除され特別保育が終了し、通常保育に戻り約2カ月経ったが、まだまだ日々の生活は制限が多かった。保育者が「今日ね、精道こども園っていう保育所みたいところに行ってきたんだ」と話を始める。「知ってる！〇〇先生が行った(異動した)ところ」「妹が行ってる！」と言う子どももいた。保育者が「そこには、ふじ組と同じ歳のお友だちもいたんだ」と続けると「へえ～」「会ってみたい！」と子どもの声が続く。「会ってみたいよね！でも今は病気が流行っているから会うのは難しいかも…」と伝えると、「じゃあ、マスクをして会うのは？」「会ってもくっつかない！」「コロナが終わったら会う」と子どもたちなりに考え、提案がある。それらの提案に共感しながら「他にはどんな方法があるかな？」と話を進めていく。「電話で話すのは？」「テレビ電話みたいなの！」との発言に、周りの子どもも「それ知ってる！」と自分の経験と重ねて言葉にし始める。**【興味】【好奇心】**

<保育者の思い・読み取り>
この頃は、『コロナ』という言葉が保育で使用しても良いものなのか戸惑いがあり『病気』という表現を使っていた。しかし、子どもたちの中には既に『コロナ』という言葉があり、感染予防として「マスクをする」「くっついてはいけない」という概念が芽生えつつあった。
リモート（テレビ電話）という手段は、単身赴任先の父親や、遠方に住む祖父母と会えない状況の中、子どもの生活の中にも広がっているようだった。全員に共通するものではなかったので、テレビ電話とはどんなものなのか保育者が説明し、クラスで共通認識をもてるようにした。

② 「精道こども園ってどこにあるの?」「どんなところ?」(7月21日)

子どもたちに身近な公園も一緒に紹介されている、芦屋市発行の『保育所・こども園 公園マップ』を用いて、打出保育所の場所・精道こども園の場所に印を付けて貼りだす。「保育所あった!」と指さす子どもに「ほんまや」と友だちが共感してくれる。「宮塚公園、行ったことある」「せ・い・ど・う・こ・ど・も・え・ん、あった!」子ども同士の発見や気づきを大切にできるように見守る。



保護者の目にも留まるように、保育室の入り口に貼り出した。送迎時に子どもが指さして「ここが(打出)保育所で、ここが精道こども園だよ」と保護者に伝えている。【言葉による伝え合い】

<保育者の思い・読み取り>

保育所名や公園など親しみのある名前を目にすることで興味を示している。日頃の教育保育が保護者にも伝わり、子どもが保護者に理解してもらえることで子どもの楽しみや期待感は広がると考える。

「こども園」という名称に聞き馴染みのない子どもにも、保育所と同じように園庭があり、同じような机や椅子が使われていることから、自分たちの保育所と同様の場所であるということが分かってほしいと願い、精道こども園のホームページの写真も一緒に貼りだした。

③ 「わぁ〜映った!」第1回リモート交流当日(7月22日)

画面に精道こども園の子どもたちが映ると、「わぁ〜映った!」と子どもたちの歓声があがる。「お〜い!」と手を振ると振り返してくれる。そんな何気ない瞬間に子どもたちの笑顔があふれる。【喜び】



「おーい!」

挨拶を交わし、自己紹介をする。「打出保育所のふじ組です」、相手は「精道こども園のあおぞら組です」画面に映った半分の子どもしか立たなかった。「あれ?」と疑問に思っていると、「あ!(あとの半分の子どもたちが)立



った!」と子どもが気付く。「精道こども園のそよかぜ組です」同じ4歳児クラスが自分たちの保育所には1クラスだが、こども園には2クラスあることを知る。



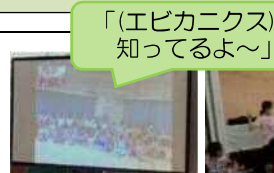
「え!?(帽子の色)一緒?」

「帽子の色は黄色です」と言うと、画面の向こう側の友だちがザワザワしている。どういうことか分からずにいると、精道こども園の子どもたちが「帽子の色は黄色です」と教えてくれた。「え?」「一緒だね!」と驚いている。【気づき】【疑問】

<保育者の思い・読み取り>

まず、同じ地域に同じ年齢の子どもがいることを知り、画面越しではあるが“繋がる”ことに喜びを感じてほしいということをお願いとした。芦屋市立保育所・こども園は共通の理念・方針・目標のもと、教育保育を実施している。当然、建物や地域の特性による違いはあるが、共通していることも多い。通常保育が再開されたとはいえ、施設内で過ごし他者との接触をできるだけ避けるという、閉ざされてしまっている現状は変わらない。だからこそ、“一緒”をたくさん見つけて、自分たちと同じ状況の友だちがいるということを知ることで、子どもの世界を少しでも広げたいと思った。“一緒”と“違う”を意図的に組み込んだ結果、離れた友だちに対する繋がりを感じ、相手を想う気持ちの芽生えとなっていると考える。

子どもたちは、自分たちが大好きな体操『エビカニクス』を一緒にしたいと思っていた。しかし、精道こども園の友だちが知っているかどうか分からず聞いてみることにした。「エビカニクスって知ってる?」と尋ねると、画面の前のみんなが、頭の上で大きく丸をつくり「知ってるよ〜」と教えてくれた。「よかった」と安堵し、「早くしよ!」と立とうとする。【意欲】



「(エビカニクス)知ってるよ〜」



一緒に体操『エビカニクス』

体操の後「また遊ぼうね」と約束をして、リモート交流を終了する。【次への期待】

<保育者の思い・読み取り>

日頃の遊びの中から一緒に楽しめるもの、画面越しでも子どもたちが“一緒に遊んでいる”と感じられるものを選択する。

体操をする為の十分なスペースを確保できるように、スクリーンの配置を工夫する。体操は十分に楽しめたが、言葉のやり取りの時には子どもが画面に向かって近付いてしまうことが分かった。次回は、画面から見切れてしまう子どもが出ないように、椅子・雑壇等を使用して環境の工夫をしたい。

④ 「覚えていてくれるかな…」 そうだ！お手紙を書こう！

リモート交流が終わってすぐに、子どもたちと振り返りを行う。「楽しかった」「またしたい」と声があがると同時に、「(自分たちのこと)忘れちゃわないかな…」という不安が出てくる。そこで、覚えておいてもらう為にはどうすれば良いか話し合う。「写真を送る!」「その写真に名前とマークを描いたら?」など様々なアイデアが出るが、今回は『自分の顔を絵に描いて、そこに先生がマークを書いてお手紙として送る』ということに子どもたちが決めた。【想像力】



「めっちゃ楽しかった」
「またテレビ電話したい」

【協調性】【自己調整】

<保育者の思い・読み取り>

また遊びたいと願う子どもの姿から、遊びの経験として楽しかったと感じていること、また地域の友だちとの繋がりを喜んでいることが分かる。ICTの画面の中の“楽しい”だけでなく、実際の体験や経験・気付き・発見に繋げていきたいという思いから、子どもたちが出したアイデアの中から手紙交換という活動に発展させる。

芦屋市立保育所・こども園では、子どもが使う個人マークは簡易に書けるものを採用しており、類似するものが多いが違いもある。互いの園での気付きに繋がることをねらい、双方の手紙にマークを付けることにした。

⑤ 「コロナが終わったら…」子どもたちの正直な気持ちと前向きな姿（7月27～28日）

「どんなお手紙書く?」と子どもたちと言葉を決める。案の中には「コロナが終わったら本当に(会って)遊ぼうね」「コロナが終わったら公園で遊ぼうね」という声もある。【想像力】



手紙を送る時は、切手を貼り、住所(郵便番号)・宛名を書き、裏には自分のことを書くことを伝える。「ぼくは、芦屋市に住んでる」「私は〇〇町に住んでる」と県・市・町を並列で認識している子どももいる。「兵庫県の中に芦屋市があって、打出保育所は宮川町・精道こども園は川西町にあるんだよ」と説明しながら書く。【学びに向かう力】



<保育者の思い・読み取り>

「コロナが終わったら…」という子どもの声。楽しかったけれど本当は実際に会って遊びたいという、正直な気持ちに触れる。子どもたちの中では、今は会えないことも分かっている、でも「コロナが終わったら」と前向きなイメージをもつ姿にも驚かされた。

都道府県についての認識や理解はまだ難しいが、住んでいる地域についての興味関心や気付き等に繋がればと考える。

⑥ 「やっぱり、ほんとに会いたいわ…」(7月30日)

手紙を送って数日後、精道こども園の職員が手紙の返事を届けてくれた。「お手紙届いたよ、ありがとう」という精道こども園の担任の言葉に、届いていたことを確信した様子。「今日はお手紙の返事を持ってきました」と精道こども園からの手紙を受け取る。「打出保育所の住所が書いてある!」と早速気が付く子どもがいる。「ふじ組でもしてる、まんだら(塗り絵)や!」「〇〇くんと同じ木マークあった」「私と同じマークあるかな?」「こんなマーク(打出保育所には)ない!」【気付き】【比較】

「お手紙の返事を持ってきました」



「さあ、お部屋に戻ろうか」と声をかけると、1人の子どもが「やっぱりほんとに会いたいわ…」と小さくつぶやく。



精道こども園からの手紙

「まんだら(塗り絵)や!」

<保育者の思い・読み取り>

まんだら塗り絵は、自分たちも取り組んでいる遊びであり、また共通点を見いだしている。個人マークについては、自分と同じマークを探しながらも、初めて見るマークがあるということは、自分のマークはないかもしれない、ということに気付き始めている。

「やっぱりほんとに会いたいわ」という呟きに、リモート交流だけで終わらせてはいけないと改めて強く感じた。

《ここまでの考察》

1回目のリモート交流を通して、子ども自身が“一緒”“違う”に気付き、共通する部分が多いことを感じている。リモート交流以降も手紙などの活動を重ねれば重ねるほど、子どもの“会いたい”という気持ちが増していき、最終的に会えるという確証のない中、担任として子どもに期待させて良いのかという戸惑いがある。また、保育者として、次回のリモート交流の予定まで時間があくが、会ったこともない友だちに対する子どもの気持ちは継続するだろうかという疑問がある。

『早く待ち合わせしようよ』『一緒って嬉しい、違うって面白い』

第2回 リモート交流 ～自分と違う世界を知る体験を通して～

⑦ 「早く待ち合わせしようよ」(8月～)

リモート交流以外にも、ICT を活用した取り組みは月に1回程度行っていた。その時に機材を目にする度に、「今日はICTで何して遊ぶの?」「精道こども園のお友だちとお電話する?」と聞かれ、「今日は待ち合わせしてないんだなあ」と答えると「早く待ち合わせしようよ」と言う子どもの姿がある。

＜保育者の思い・読み取り＞

会ったことのない相手であるにも関わらず、また遊びたいという思いがあり、その気持ちの継続に驚かされる。休日に、「精道こども園を見に行きたい」と保護者と出掛けた子どももいた。「結構近いんだ!」という感想だったという。リモートという画面を通じた活動であるがゆえ、“遠く離れたどこか”というイメージがあったということが分かる。

⑧ 「ハロウィンパーティー…?’でも、何だか楽しそう!(10月22日～)

10月に入り、クラスではハロウィン制作や体操などに取り組んでいた。子どもたちの発言から精道こども園と日程を調整し、「10月30日に、精道こども園のお友だちとテレビ電話でハロウィンパーティーをすることに決めました」と発表すると、「やったー」と喜ぶ子ども、「それなに?」「おぼけ、こわい…」と様々。この日から、ハロウィンパーティーに向けての計画や準備が始まる。まず、何をするか・何をしたいか、ホワイトボードを使用しながら子どもの意見をまとめていく。【協同性】

＜保育者の思い・読み取り＞

ここ数年、ハロウィンがイベントとして街中に溢れるようになり、保育の中でも楽しむようになった。ハロウィンパーティーと題しながらも、お互いの遊びに興味をもち、お互いの生活や施設のイメージを広げられるものという点をねらいにおき、双方の子どもの声を聞き取りながら、精道こども園の担任と連絡をこまめに取り、計画を進めていく。

ハロウィンパーティー自体の経験がなくても、“パーティー”という言葉からイメージを広げる子どもが多い。リモート交流が2回目だったため、クラス全体で、リモート交流についてイメージできた上で話し合いができています。

⑨ 「ふじ組よりいっぱいいるから、いっぱい作らないと」ハロウィンパーティーの準備をしよう!

お菓子交換をしたいという案が挙がり、元々クラスで取り組んでいた秋の自然物を用いた制作のビスケットを指差し、「これをあげるのはどう?」と子どもから提案がある。すると隣にいた子どもが「作ったものは自分で持って帰りたい」と表情が曇る。そこで、子どもたちとどうすれば良いか考え、新たにプレゼントするためのビスケットを作ることにした。「1人1個(作るだけ)じゃ足りないよね?」「だって、あおぞら組とそよかぜ組があるもん!」【思考力(数的概念)】



表現技法のマーブリングを使用して、仮装するためのお面作りにも取り組んだ。出来上がるとそのお面を着けて「トリックオアトリート」「おかしをくれなきゃイタズラするぞ」と子どもたちは園庭を走り回った。



＜保育者の思い・読み取り＞

数の認識として、具体的な数字から数量を理解している訳ではないが、自分達が1クラスであるのに対して相手が2クラスあるから、1つずつ届けるためには“1人1つでは足りない”ということに気付いている。また、画面を通して実際の相手の姿を見ているため、“たくさん”必要だと思っている。

お面のマーブリングの土台(下絵)は、ICT 活動の1つとして取り組んできたアプリを使った遊びと連動させた。アプリ内に自分の作品を取り込むことで立体的に動き出すというものだが、それを精道こども園への遊びの紹介として取り入れられるのではないかと考えた。



⑩ 「楽しみ！」明日はハロウィンパーティー！（10月29日）

子どもたちとの計画通り、リモート交流に使用する遊戯室を飾りつける。「どうやって飾り付けする？」と尋ねると「ジャックオーランタンは、紐を先生がつけて、そこにつける」と提案がある。「いいね！」と、友だちも賛同してくれる。「折り紙はどうやって飾る？何がいる？」と聞くと「セロテープをくるんってする」と今までの経験が生きている。どこに貼るかということについては「どこでも良いよ」「貼っても良い場所か考えてみて」とだけ伝え、子どもの主体性に任せる。

当日と同じように、プロジェクターを使用してスクリーンに子どもの姿を映し出す。「楽しみ」「練習しよう」と声があがり、リハーサルを行う。【主体性】【期待】



<保育者の思い・読み取り>

クラスでの今までの経験として、テープの使い方や作品の飾り方の選択肢を意図的に示していた。そこから、子ども自身が遊戯室に飾るならどの方法が良いか選択している。子どもの主体性に委ねることで、「ここだと映らないかも」「この方がよく見えるんじゃない？」等、試行錯誤する姿が見られた。また、友だちの発言がきっかけとなり、新たな視点や気付きにも繋がっている。

スクリーンを使用したリハーサルを行うことで、自分たちが相手にどのように見えているか理解し、明日へのイメージや期待感を膨らませている。

⑪ 「久しぶり〜！」第2回リモート交流当日 ハロウィンパーティーをしよう！（10月30日）

第1回リモート交流の反省から、子どもが画面に納まりきるように、雑段を使用する。また、相手の声が聞き取りやすいように、音声の接続をCDデッキではなく、アンプとスピーカーに接続し環境を整える。

「魔女の衣装を作りました」



待ち合わせの時間になり、画面に映し出されると、「おーい！」「久しぶり〜」「元気だった？」と前回より積極的に声を出している。

「お手紙届いたよ」と相手の画面に自分たちが送った手紙が映しだされる。「前に描いたやつや！」と本当に届いていることを深く認識している。次に、お互いの仮装を紹介して、歌を披露



した。その後、代表者が感想を言い合う。【言葉による表現、伝え合い】

<保育者の思い・読み取り>

自分達の書いた手紙が、実際に相手に届いていたことを目にすることで実感し、喜びが増している。前回は集団での対面であったが、今回は仮装の紹介や感想を言う機会に個での対面も行う。代表者がカメラの近くに行くことで相手の顔も大きく見え、楽しみが広がっている。

精道こども園 第1問（そよかせ組）
Q こども園には松の木が6本ある、○か×か。 答：×
打出保育所 第1問
Q 保育所では毎日お弁当を食べている、○か×か。 答：×
精道こども園 第2問（あおぞら組）
Q 国旗の塗り絵をしている、○か×か。 答：○
打出保育所 第2問
Q 保育所にはうんていがある、○か×か。 答：○

次のプログラムの『クイズ大会』では、子どもたちと内容を決めて出した。



「正解は…バツでした！」

お互いの施設のことなど、子ども同士がイメージしにくいものについては、タブレットを使用し、実際の写真で示すことで、視覚的に認識しやすいようにする。映し出される写真を見ても「松の木が11本もあるん？」と信じ難い様子の子もいる。【疑問】



クイズの正解を知り、一喜一憂

<保育者の思い・読み取り>

第1回リモート交流の考察より、音声には時間差があることが分かっており、大人数で楽しむためにはジェスチャーを交えた方が良く考えていた。そこで今回は〇×クイズを採用する。クイズを考える時、子どもは相手の園での生活を思い描き、イメージを膨らませて想像している。それが自分たちと一緒になのか違うのかという疑問に繋がり、クイズの内容を考えていたことが分かる。



昨日食べた給食のメニューまで同じだと知り、こども園でも給食を食べているという想像はしていたが、メニューまで同じだとは思っていなかったことが分かる。また、こども園にも保育所と同じようにうんていがあることを知るなど、新たな発見や気づきを得ている。このように、クイズの中に織り交ぜられた互いの生活や遊びの中の共通点を見出して喜んでいる。



「合言葉は…」と言われ、画面越しにみんなで一緒に「トリック・オア・トリート！」と叫んだ。そして、お互いに秋の自然物を使って作ったお菓子を紹介した。「みんなの為に作ったよ」「ぼくたちも作ったよ」「やったー！」と喜ぶ。「あれ？どうやって渡すの？」という声が両方の園から聞こえてくる。



「バイバーイ」「またね～」

「また遊ぼうね」「今度はどこかで会えると良いね」と約束をしてリモート交流を終了する。【期待感】

<保育者の思い・読み取り>

前回はリモート交流後に手紙を書いて交換したため、今回は画面の中に相手の友だちと一緒に映ったものが、手元に届くという経験にしたかった。子どもの中で、画面の中で歌ったり踊ったりすることは分かる、手紙は送れば良い、でもこのお菓子を届ける方法のイメージが湧かず戸惑っていることが分かった。

⑫ 「どうやって渡すの？」

リモート交流の後、子どもたちから「ねー、お菓子は どうやって渡すの？」とすぐに質問がある。「どうする？」と返すと「え、決めてないん？」という反応。「子どもが会えないんだったら、先生が行くのは？」と提案がある。保育者が届けることが決まると「落とさなようにね！」「袋に入れたら？」「あおぞら組とそよかぜ組があるから、袋は2つにした方が良くない？」と、次々に言葉が出る。子どもたちの思いを整理し、午睡中に届けることを約束する。



すると、「松の木が本当に11本あるか見てきて！」「うんていがあるのかも(見てきて)！」と声があがり「タブレットで写真を撮ってくるね」と伝える。【疑問】【探究心】

<保育者の思い・読み取り>

保育者が届けるという計画は当然事前にあり、段取りも組んでいた。しかし、子どもが考え試行錯誤し、それが実現することで心が弾みより楽しめるのではないかと考えた。

確かめてきてほしいという発想は想定外であった。松の木が園内に11本もあるということは、園舎を知っている保育者にとっては、そのような施設だという概念があるが、訪れたことがない子どもにとっては信じがたい光景なのだとすることに気付かされた。

⑬ 「打出保育所の先生がきた！」精道こども園にて

保育者が精道こども園を訪問し、ドア越しに保育室の様子をうかがっていると、こちらの存在に気付いた子どもが「あ！打出保育所の先生がきた！」と指差し、自身の担任に知らせる。手にしていた紙袋を覗きにくる子どもがいる。紙袋の中にお菓子が入っていることを確認して微笑み、クラスの友だちの輪の中に戻る。【期待】



「ハロウィンパーティー楽しかったねって(打出保育所の友だちに)言っというて」

【興味】

<保育者の思い・読み取り>

画面の中にいた打出保育所の保育者の訪問に、お菓子を持ってきたのだろうということは分かっている。前回の手紙交換と今回の訪問で、双方の担任が互いの施設を訪ねることで子どもにとって実在することをより実感できたのではないかと考える。

⑭ 「ちゃんと渡してきてくれた?」「松の木は11本あった?」

精道こども園から戻ってきた保育者を見つけるなり、子どもたちからの質問が止まらない。お菓子を届けたことを伝え、撮影してきた松の木の写真を見ながら一緒に本数を数える。松の木が生えている場所が広範囲だったため、敷地のイメージのない子どもにもわかりやすいように、動画も併せて使用して説明した。「ほんまや」と、タブレットの画面ではあったが、一緒に数えたことで納得する。【知的探求心】



<保育者の思い・読み取り>

お菓子交換では、リモート交流時に画面に映っていたものが、目の前に届くことで繋がりを感している。松の木に対する疑念は、タブレットで写真を見ることで払拭されている。そのことから、子どもたちが、繋がりをより実感するために、精道こども園で保育者が渡している写真をタブレットに映し出して見ても良かったのではないかと振り返る。

《ここまでの考察》

ICT機器を含む環境面では第1回リモート交流の時より整っていた。Wi-Fiの通信速度には課題があるが今すぐに改善できることではないので、その中で楽しめることを模索していきたい。ハロウィンパーティーの流れは子どもと決めて確認したが、やりたいと提案したことを全てできると思っていた子どももいた。プログラムとして紙に書いた方がより見通しをもちやすく、分かりやすかったのではないかと。

この頃は、少しずつ所外に出かけるようになっており、一緒に思い切り遊ぶことはまだ難しくても、公園の垣根越しなどで「おーい」と手を振ることぐらいできるのではないかと考えるようになっていた。

『私たちもやってみたい』『今度こそ本当に会って遊ぼうね!』

第3回 リモート交流 ～日頃の遊びを共有する体験を通して～

⑮ 「年賀状を書きたい」(1月13日)

年が明けて数日経ったある日、「精道こども園のお友だちに年賀状書きたい」と声がある。1人の提案をクラスで相談した。「いいね!」「この前、年賀状書いたよ」「おばあちゃんから届いた」と発言がある。何でもやりたい・やってみたいと思える前向きなクラスだ。どんな年賀状にするかという案をクラス全体で出し合う。その頃、数人のグループで考えて1つの答えに決めることや、協力して作品を完成させることでの協調性の育みを大切にしていた。そこで、数人のグループで1枚の年賀状のデザインを決めて“みんなで”作ることにした。「あとは切手を用意してね」と言われる。以前の手紙交換をした時の学びが生きている。【協調性】



「精道こども園のお友だち、ラQ知ってるかな?」

<保育者の思い・読み取り>

保育者としては、年も明けており15日(松の内)にはなっていないとはいえ、急な子どもたちの発言に戸惑いもあったが、精道こども園の友だちへの思いが継続していたことを嬉しく思った。また、子どもの主体性を大切にしたい思いも重なり、クラスとして取り組むことにした。年賀状の内容に遊びを載せることで、お互いに刺激になるのではないかと考えた。

精道こども園にも連絡を取り、予定にない急なことだが受け取ってほしいと伝えた。快く受け取ってくれただけでなく、寒中見舞いに繋げる提案までしてくれた。他園の子どもたちの思いに寄り添い、遊びを発展させてくれたことで、子どもの想いの継続や遊びの広がりにつながっている。

⑯ 「か・ん・ち・ゆ・う・・・だって!」(1月28日)

「精道こども園から『寒中見舞い』っていう、年賀状のお返事が届きました」と伝え、「イエーイ」「やったー」と喜ぶ。折り紙の切り紙が貼られており「なんかすごい」と見たことがない遊びに興味を示す。「折り紙を切ってるんじゃない?」と子どもの疑問の声に、保育室の横を通りかかった5歳児が「それ知ってる!折り紙を折ってから切るんだよ」と教えてくれる。“わたしたちも作ってみたい”という気持ちに繋がる。【興味】【意欲】



「何かきれいなものが貼ってあるよ」

<保育者の思い・読み取り>

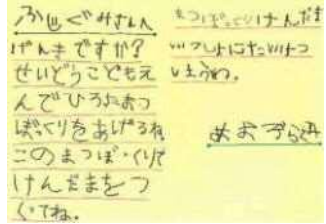
同じ年齢の友だちの遊びに興味をもっている。離れていても刺激し合える環境はICTを活用したからなのではないか。年長児への遊びの憧れの“難しそうだけどやってみよう”とはまた違い、同年齢が取り組んでいる遊びということで“自分たちにもできるかもしれない”と捉えていると考える。

⑩ 「まつぼっくりけんたま…?」「松ぼっくりけん玉って面白そう」(2月8日)



「精道こども園のお友だちとテレビ電話(リモート交流)をすることになりました!」と発表すると・・・
「やった〜!」と大喜び。

精道こども園との第3回リモート交流が決まったことを伝える。そして、精道こども園から松ぼっくりと手紙・動画が届いた。手紙には「この松ぼっくりでけん玉を作って対決をしよう」と書かれていた。「松ぼっくりけん玉?」「何それ?」という声があがる。動画では松ぼっくりけん玉の作り方を説明してくれており、どんなおもちゃなのか理解し



「・・・失礼します」
「紙コップと、風糸ください」

た様子だった。「何でこんなに松ぼっくりがあるんやろ?」との子どもの疑問に、保育者が「精道こども園には松の木が・・・」ときっかけを言うと「そっか、11本あるからや!」と気付く。

映像から、松ぼっくりけん玉を作る為には何が必要か読み取り、それを子どもたちが準備する。保育室にない物は「先生のお部屋にあるんじゃない?」という声があり代表の子どもが聞きに行く。【主体性】【社会性】【数の認識】



「何個いる?」



けん玉が出来上がったその日から練習が始まった。子ども同士で「がんばるぞ〜」「エイエイオー!」という声が自然に挙がる。【仲間意識】

<保育者の思い・読み取り>

当初、3回目の交流はリモートではなく実際に会って交流したいと考え計画してきたが、新型コロナウイルス感染症の第3波到来にてそれが難しくなった。その分、第2回リモート交流よりも発展させた内容になるように、精道こども園の職員と検討を重ねる。

松ぼっくりけん玉制作に関しては、全てを事前に用意せず子ども自身が考え行動することを大切にする。職員室に入る時には何と云うのか、担任以外の何も知らない保育者に分かるように伝える為には何と云えば良いのかなど、社会性の基礎として必要な言葉の獲得にも繋がると考えた。

“対決”という言葉に何だかよく分からないが面白そうだと期待している。運動会での取り組みを通して、勝負をするという経験を重ね、その楽しさや悔しさを味わっている。その経験から、勝つためには練習をしようという思いに至っている。

⑪ 「見て見て、私たちも作ったよ」第3回リモート交流当日(2月16日)



子どもたちと、どんな交流会にしたいか話し合いを重ねて当日を迎える。年賀状・寒中見舞いが届いたこと、寒中見舞いに貼ってあった切り紙を自分たちも作ったことを伝えた。



今、遊んでいる遊びの中で好きなものを互いに紹介した。「お部屋ではプリズモ駒をしているよ」と言うと「あ、知ってる」「こども園にもある〜!」と頭の上で丸印をつくっている。「お外ではホッピングをしてるよ」とホッピングを見せながら伝える。「こども園にもあるけど、やったことない」とのこと。精道こども園での遊びとして、おすし屋さんごっこ・縄跳び・楽器遊びをしていることを教えてもらう。



一緒に律動(リズム遊び)

律動(リズム遊び)を一緒に行う。精道こども園から聞こえてくるピアノの音に「知ってる!」と体が動く。「(精道こども園の友だちも)知ってたね」と、画面越しに同じように動く友だちがいたことに「何で知ってるんやろう・・・?」と疑問も抱いている。自分たちの好きな律動の動き『ハチ』を打出保育所のピアノに合わせて遊ぶ。精道こども園の「知らない」という声を受け、遊び方を説明した。【疑問】【興味】

<保育者の思い・読み取り>

第2回リモート交流の反省から、リモート交流の流れを口頭だけでなく紙に書いて示し、見通しをもてるようにした。子どもたちの中では他にも紹介したい遊びがあったが、紙に流れと共に書いておいたことで戸惑う子どもはいなかった為、視覚的な効果もあったのではないかと考えた。

互いの遊びを紹介し合うことで、“同じ”遊びに共通点を見だし喜び合うだけでなく、次の段階として“違う”遊びを新しい遊びとして互いに取り組むきっかけになればと考えた。



「いっせーのーで！」

けん玉対決は、各クラスのその日の人数を確認・調整して、クラス対抗で3回戦行った。3クラス同時に「いっせーのーで」と行い、入ったら立つ・入らなかったら座るというルールだ。入った人数をそれぞれ担任が数え、得点ボードに記入する。勝敗の発表に一喜一憂している。自分のけん玉が入らなくてもクラスとして勝つと喜び、反対に自分が成功してもクラスとして負けると悔しがっている。【協同性】



「やった～入った！」



ただいまの結果、ふじ組の勝ち！「イエーイ！！」

<保育者の思い・読み取り>

打出保育所 対 精道こども園という対決ではなく、クラスごとに対決することで、クラス数の違いがあっても同時に楽しめるようにする。また、各クラス“みんなで何個入ったか”という勝負にすることで仲間意識が育つことをねらう。

全員が同時に勝負でき待つ時間がない為、子どもたちの気持ちが1つになり楽しんでいる。

子どもが「もうすぐ何組になりますか？」と質問すると「たいよう組かにじ組になります」と返ってくる。「ぼくたちは、きく組になります」と伝える。精道こども園は新園舎に引っ越すということを写真と共に説明してくれた。秋の消防署見学に行った時に、工事中の園舎の横を通ったことを思い出している子どももいる。【伝え合い】【期待感】

「きく組・たいよう組・にじ組になったら、ICTじゃなく本当に遊ぼうね」「今度こそ本当に会って遊ぼうね」と約束してリモート交流を終える。【次への見通し】



精道こども園 新園舎の写真

<保育者の思い・読み取り>

今も2つクラスがあるから次も2クラスなのだとすることに疑問ももたず理解している。互いに年長児になるということに期待をもっていることが読み取れる。

今後の新型コロナウイルスの感染状況等、日本がそして世界がどうなっていくのかは誰にも分からない状況である。今年度は実際に顔を合わせることは難しかったが、来年度こそは会えますようにという双方担任全員の思いを込めて、この言葉で終えることにした。

⑱ 「縄跳びやって良いの?」「ぼくもしたい!」(2月17日)



「あ!今できた!」

戸外遊びの時に縄跳びを子どもの目につくところに用意すると「縄跳びやって良いの?」と早速取り組み始める。それを見た他の子どもが「ぼくも縄跳びしたいーい!」とやって来る。「そよかぜ組さんと一緒だね」と声をかけると、まだ跳べない子どもが「どうやってたっけな」と思い返し、跳べるようになった友だちを観察しながら同じようにやってみようとしている。【意欲】

室内では、保育室の環境として設定している自由に使える折り紙を使用し、切り紙で遊ぶ姿が続いている。何度も作ることでその時によって違う模様が現れることに気付く、遊びの継続に繋がっている。【試行錯誤】



<保育者の思い・読み取り>

短縄は、保育所内でも年長児が取り組む姿を目にしていたが、“短縄は年長児のもの”という考えがあったようだ。精道こども園の友だちの姿に加えて、子どもたちの手に届くところに短縄を置くことで、やりたいという意欲に繋がっている。

《ここまでの考察》

第2回リモート交流以降、年賀状以外にも、給食を食べながら「精道こども園のお友だちも同じ〇〇食べるかな？」と呟き、ミニクッキングで食べられるビスケット作りをした時には「精道こども園に持って行く？」と話す姿があった。消防署見学に行く時に通った工事中の新園舎を見た時には驚いたような少し不思議に思っているような表情をしていた。また、阪神淡路大震災で亡くなった精道保育所(現精道こども園)の子どもたちを想って鶴を折っていると「テレビ電話で干羽鶴持って行きますよって言う？」という発想になっていた。リモート交流の時だけでなく、離れた場所で過ごし会ったこともない友だちにも想いを馳せていることが分かる。

リモート交流に取り組もうと思ったきっかけの1つに、“繋がり”を大切にしたい、コロナ禍で地域との交流がしにくく閉ざされた空間になってしまいそうな保育所生活を打開したいという思いがあった。“一緒”と“違う”を並べ、重ね合わせていくうちに“一緒”に喜びを感じるだけでなく、“違う”ことに疑問を抱き、“違う”からこそその違いに興味をもち、同じようにその遊びをしてみたいという意欲に繋がり遊びが広がっている。

《4歳児クラスとしての考察とまとめ》

今回は『ICTでつながる』をテーマに取り上げた。取り組みを重ね深めていくことで、繋がるだけに留まらず、互いの遊びを刺激し合い、互いに高め合えたのではないかと考えるようになった。また、実際に会いたい、一緒に遊びたいという想いは継続し続けたことが分かる。その想いに今年度は応えることができなかった。来年度こそはと、期待せずにはいられない。会えない時間が長かったからこそ、実際に会えた時の感情を十分味わってほしいと願う。

今年度4歳児クラスでは、コロナ禍とは関係なく、教育保育の“これから”歩みを進めるために様々な角度からICTの可能性を追求した。ICTでなければできないこと・ICTならではの取り組みにしたい、ということにこだわり、ねらいをもって取り組んだ。コロナ禍をきっかけに新しい発想が多かったこともまた事実である。例年行くことができていたバス遠足が今年度は中止になった。それならば、バス遠足では行けない遠い所までICTを活用して出掛けよう『美ら海水族館に行こう』と題し、映像を見て学び楽しみ、制作活動に繋がった。ICTを取り入れたことによりコロナ禍で所外に出ることが難しい状況にあっても、クラスとして共通の学びやイメージをもち、遊びに繋がれたことは大きかった。

そして、ICTの特性の1つとして動く映像を資料として共有し、学びに繋がる新しい形にもなるのではないかと考えるようになった。ICTを教育保育に使用していなかった頃は、学びや知識を深める1つの方法として写真を展示してきた。動画は、そこからの発展だ。例えば、阪神淡路大震災の地震発生時の映像は残っていない。当時、誰もが衝撃を受けた阪神高速道路が倒れた映像を多方面から動画としてみたとき、立体的に捉えることが容易だった。更には、映像として提供した時、子どもたちの前に立つ保育者個人がもつイメージを知るということを超えて、子どもたちは自分なりに気づきを感じるようになる。それこそが新しいツールとしての開拓のようにも思えた。

雪の降ったある日、クラスで雪の結晶の観察をしていると、「iPadで大きくして見れば良いんじゃない」と子どもから提案がある。この頃には、ICTを使った活動に取り組もうとすると、その前日に疑問をもったことをタブレットで“調べたい”と訴えてくる子どもの姿が出始める。タブレットを道具や教材の1つとして捉え、その特性を活かした活用方法を認識していることが分かる。

これらのことから、ICTを活用することで、これまでの教育保育の軸はそのままに、より広げ深めていくことができるのではないかと考えるようになった。保育者からの教材としての働きかけや、タブレットを活用しての遊びの提案だけでなく、子ども自身の中にハサミや図鑑と同じような道具としての位置づけにもなっている。これは、ICTの活用が消極的だった頃には想像もしていなかった世界であった。想像以上の可能性を見い出せてきたように感じている。そう考えると、子どもたちの発想はしなやかで豊かに広がっていく。ICTを1つのツールとして教育保育に取り入れることで、これからはもっと新たな未来があるのではないかと考える。



写真を撮影し、スタンドグラスを仕上げるというアプリを使った活動

タブレットをグループで共有して“色”を集めているところ



音を録音し、粘土のように編集して遊ぶアプリを使った活動

友だちと協力して“音”を集めているところ



阪神淡路大震災の映像を見て学ぶ活動

学びに繋がる姿



自分の塗った塗り絵が立体になるアプリを使った活動

映し出された作品をプレゼンしているところ

ICTでふかまる 5歳児 ～消防署見学がICT教育保育に発展し、うまれたもの～



今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、数々の行事が例年通りに行われず、教育保育現場では様々な工夫を凝らしながら過ごしている。その中で、屋外で見学出来る「消防署見学」は例年通り行くことができたが、ビデオ鑑賞と消防庁舎内や消防車内の見学は中止になった。そのため翌日に、消防署で見た車や道具を使った人命救助と防災用具の映像を保育所内で見ることにした。「(煙で)こんなに前が見えないんだ」「昨日見たやつだ!(エンジンカッター)」等、感じたことを子どもたちは口々に発言する。実際に火事に巻き込まれた際に、慌てずに避難できるための「煙体験ハウス」の体験も難しい今、映像を見たことで煙の恐ろしさや、実際に触らせてもらった『散水ホース』が、なぜ頑丈で重いのか、映像内の水圧を見て分かったようだ。

映像を見た後、「どのようなことを感じたか」子どもたちと話し合った。「火事って怖いと思った」「ホースから水が沢山出てびっくりした」等、発言する。「火災報知器とか燃えにくいカーテン(防災グッズ)が保育所にもあった!」という一言に、「火災報知器、隣の部屋にもあるよ」「共同室にもあるよ」「この部屋に2個ある!」と次々と呟き出す。「ねえ、保育所に何個あるんだろう?」「10個くらいじゃない?」「もっとあるよ!」と言葉が飛び交い、「調べてみたい!」という一言から“探してみたい!”という思いがクラス全体に広がっていった。そこで火災報知器がいくつあるのか、保育所内を探検するという活動に繋げることにした。



「いっぱい見つけるぞー!」

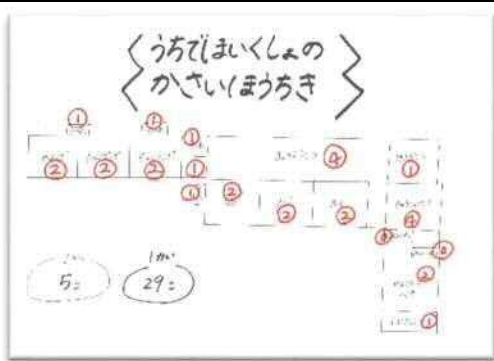


これまで、ICT機器を活用したい気持ちはあるものの、どのように保育に取り入れると子どもの心が動くのか、果たしてICT教育保育は、就学前の子どもたちに必要なのか?自分に問い続けながら、実体験を軸にした保育を行ってきた。そこで今回、保育の中で実際に体験できなかったことをICT機器を用いて知ることを試みたところ、子どもたちの探求心が芽生え、「もっと知りたい!」という気持ちが生まれてきたように思う。今回はICTを用いる機会を増やすことで、どのように学びが深まり、子どもの姿が変化していくのか、日を追って検証することにした。

「火災報知器のこともっと知りたい!」「どうしたら分かるかな?」

～様々な方法を通して“知る”喜びを味わう～

① 「火災報知器、何個あるの?知りたい!」…第1回 保育所探検(11月17日)



映像で見た火災報知器が身近にあることを知り、保育所内探検が始まった。保育所内の地図を書くとき「火災報知器を見つけたらここに書いていいの?」「早く探したい!」「本当に探検に行くみたい!」と探したい思いがますます膨らみ、目を輝かせて部屋を飛び出す。



「火災報知器って給食室にもありますか?」

「押し入れには絶対あるね!」



【意欲】【次への期待】【主体性】
 保育所中を駆け回って探し出し、「全部の押し入れにある!」「トイレには1個あって部屋には2個だった!」と次々に報告に来る。「給食室には4個だって!」「職員室には2個!」と、入ることのできない部屋は、自分たちで聞いてきていた。そして、地図に記載することで、火災報知機が29個あることを発見した。**【数的概念】【発見する喜び】**

<保育者の思い・読み取り>

保育所内の地図を作成し、他クラスの子どもが戸外にいる時間に調べられるよう物的・人的環境を整えた。保育者の指示を待つことが多いクラスだが、自分たちで入ることのできない部屋についてどう考えるのか見守っていると、男児1名が近くにいた職員に声をかけ、調べに行き、続々と他児が後

に続いていった。この姿から、ICT を用いて映像を見た後、子どもの探求心に寄り添い主体的な活動へ繋げたことで、子どもたちの“知りたい”という気持ちがより一層大きくなっていたのではないかと考える。

② 「どうしたら分かるかな？」…消防士さんに手紙を書いてみる？（1月13日）

保育所内の火災報知器を探した後、感じたことを話し合った。すると「どうしてあんな形なの？」「どうして高い天井にあるの？」「どんな音が鳴るのだろう？」と疑問の声が続く。「どうやって火事に気が付くの？」「煙？温度？」「中にカメラがあって誰かが見ているんだよ！」と様々な意見が飛び交い、“気になる”ことを話し始めた。子どもたちなりに知恵を出し合うが、答えを出すことが出来ない。「どうしたら分かるかな」という保育者の問いかけに、「火災報知器の点検に来る人に聞いてみる？」「その人が今度来た時に聞く？」という提案があった。しかし、年に2回しか来ることがないことを知ると、次の案が出た。「本で調べる？」「あ！『しごと』の本に載ってるかも！」と本を持ってきて調べてみるが、載っておらず頭を抱えていた。そんな時、「あ。消防士さんなら知っているんじゃない？」という提案があり、「ほんまや！」と共感の声が続く。「いい案だけど、今コロナで会いに行けないね…」という保育者の声にしばらく考え、「電話する？」「スクリーンでビデオ電話する？」「手紙書く？」と声が続く。「みんなの力でできることがいいね」という保育者の声により、「じゃあ手紙なら出来そう！先生に届けてもらおうよ！」と、自分たちで手紙を書き、保育者が届けに行くことになった。【気付き】
【疑問】【試行錯誤】【思考力の芽生え】

<保育者の思い・読み取り>

実際に探し出したことで、子ども自身が気付き、感じたことを共有するということをねらいとし、活動後に振り返るための時間を設けた。火災報知器を探し出した経験から、火災報知器本体への興味が芽生え出している。話し合っている間は、子どもの想像力を制限してしまわないよう保育者は見守り、子ども同士のやり取りを尊重し、子どもから生まれた疑問や意見が子ども同士で共有できるよう話し合いを進めていった。

『郵便屋さんごっこ』というクラスでの取り組みから、手紙を書くことに慣れ親しんでおり、体験したことを実行しようとしているのだと考える。

③ 「この本読んでもいいの？」…本で調べてみよう（1月18日）



「煙って上に上がるから火災報知器って上に付いてるんだって！」「ぼくの家には火災報知器6個あったよ」「私のお家にあるのは保育所と種類が違ってた！」と、保護者に聞いたことや調べてきたことを保育者に伝える子どもが数名いる。

子どもたちが行くことのできない図書館から借りた火災報知器に関連のある本や図鑑が部屋に置いてあることに気が付くと、「何これ！見たい！」「火災報知器のこと載ってそう！」と目を輝かせる。すぐに火災報知器の情報を探し出す。更に、調べたいページを友だちと一緒に探すことで、自然と気付きや発見を子ども間で共有する姿もある。調べて分かったことをクラスで共有する時間を作り、以下のことが分かった。【探求心】【伝え合い】



- 1 火災報知器には種類があり、保育所にあるものは『熱感知器』。(熱に反応することに気付く)
- 2 天井だけでなく壁についているものもある。
- 3 火災を感知したら『受信機』というところに情報が送られる。

<保育者の思い・読み取り>

物事を本で調べるというプロセスから、様々なことに興味を広げることがねらいとし、火災報知器の情報が記載されていない防災関連図書も含めて用意した。友だちと本を見ることで、自然とコミュニケーションが生まれる様子や、火事の写真を見て火の恐ろしさを感じる姿も見られた。子どもの「調べたいな」「載っている本ないんだ」という呟きに寄り添い、環境を整えることで、子どもの学びが深まり、派生していったことが分かる。

④ 「消防士さんに手紙を書こう！」（1月20日）

消防士へ、どのような手紙を書くか子どもたちと考え、作成する。手紙と一緒に絵を送る案が上がる。と、「書きたい！任せて！」と早速取り組む。消防車や消防士の本を広げ、夢中になって絵を書く姿や、何を書こうかと本をじっくり読む姿がある。「このバイクも消防車の仲間だって！」「本当だ、格好いい」

と、絵を書くにあたって様々な分野に興味を示している。【興味】【意欲】

<保育者の思い・読み取り>

目的以外の情報も自然と学ぶことができる書籍を用いることの良さを改めて実感する。手紙の色や内容を子どもと一緒に考え、目の前で形にしていくことで、子ども自らが手紙を届けに行くことはできないが、手紙を出すという実感を得ているようだった。

⑤ 「消防士さん喜んでくれるかな？」(1月21日)

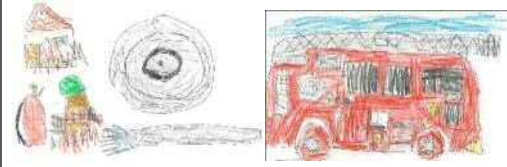


保育者が、消防署へ手紙を届けに行くことを知ると、「消防署行くのいいな!」「コロナにならないでね…」「気を付けてね!」と見送る。

手紙を届け終え、保育所へ帰ると、「おかえり!」「どうだった?」「渡せた?」と目を輝かせ、保育者の返答を待



「いってらっしゃ〜い!」



っている。「お返事書いてくれるって消防士さんが言っていたよ!」と保育者が伝えると、「本当に?」「やったー!」と歓声上がり“嬉しい”という気持ちが溢れる。「どんなお返事かな〜」「本当に火災報知器のこと知ってるのかなあ」と期待を膨らませている。【次への期待】【思いやり】

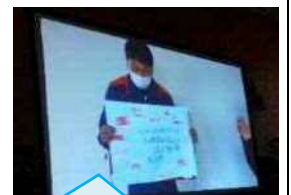
<保育者の思い・読み取り>

子どもの「いいなあ」「僕も(建物の)中まで入りたかったな」という呟きから、本来なら消防署見学で建物の中まで見学できたことや、自分たちの手で手紙を渡しに行けたことに悔しさがあることを感じる。人との関わりに制限がある、実際に体験することができない部分を、どのような形で経験できるのか考える。そこで、手紙を届ける様子を映像で撮影することで、消防署内や実際に仕事をしている様子を子どもたちに伝えたいと思う。

⑥ 「お手紙、ちゃんと届いた?」…ICT 機器を用いた新たな試み(1月22日)



保育者が手紙を届けた翌日、消防署見学の際に見ることのできなかつた庁舎内で消防士に手紙を渡す映像をスクリーンで見た。「この前行った消防署だ!」「奥まで見てみたかったんだよね」「何階まで上がったの?」と、声が続く。消防士の姿が見えると、「あ!消防士さんだ!」「中で仕事してる!」と興味深く見ている。手紙を渡す場



「消防士さんがお手紙持ってる…!」

面では歓声上がり、消防士が手紙を読み上げると、自然と拍手が起こった。満面の笑みで喜び子どもや、手を口に当て「何だか緊張する!」と友だちと目を合わせる子どもがいる。映像を見て手紙が無事に消防士のもとへ届いたことを実感し、「ちゃんと届いてよかった」「消防士さん忙しいから渡せないかと思った」と、喜ぶ。

【伝え合い】【社会性】【想像力】

<保育者の思い・読み取り>

建物の外から撮影を始めて、入口から入っていく様子や階段を昇る様子等、消防士に手紙を渡すまでの過程を、主観的に感じられるように撮影し、編集した。実際に体験が出来ない出来事をICTを活用することで疑似体験し、消防署や消防車のイメージが広がったようだった。

《ここまでの考察》

消防署見学に行き、学び得た知識にICT 保育が加わり、実体験とICT 機器からの情報がリンクすることで、子どもの心が動き、学びが派生していった。そんな中、阪神淡路大震災が起こった1月を迎えた。本園では、毎年1月に5歳児が阪神淡路大震災の慰霊碑を訪れ、被災した職員から震災当時の話を聞いている。子どもたちも自分なりに震災について考え、「可哀想だと思って寂しい気持ちになった。」「みんなを守る消防士になりたい。」「地震が起きたら、と心配になった。でも、勇気を出して頑張りたいと思った。」と、震災を知り“いのちを守っているもの”への学びが、より深まるきっかけになっていった。この経験から、「火災報知器の他にもいのちを守っているものがないか」話を広げ、防災について学びが広がることをねらいとして活動を展開していく。

「いのちをまもるものってなんだろう?」「ぼくたちこんなに守られてるんだ」

～身近にある“いのちをまもるもの”に気付く～

⑦ 「みんなのいのちを守っているもの…?」(1月22日)

手紙を渡す映像を見た後、映像の中で自分たちの命を守っているものがあったか話し合った。消防車、救急車、放水ホース、消防士、先生、消火器があがり、次に保育所内には何があるか考えてみた。防災カーテン、突っ張り棒、水、防災頭巾、非常ベル、食料、薬と声が続く。「実は、保育所にはまだまだみんなの命を守っているものがあるんだよ」と保育者が言うと、「探してみたい!」「保育所探検したい!」と声があがる。そして“いのちを守ってくれるもの探検”に出発した。【次への期待】【好奇心】【探求心】

<保育者の思い・読み取り>

探しに行く前に、子どもたちに質問することで、保育者の予想を超える子どもの知識量に驚かされた。消防署見学で実際に見て触り、映像で水圧を確認した放水ホース・火災報知器を探す中で関連して学んだ非常ベル・避難訓練で用いる防災頭巾・阪神淡路大震災の話聞いた際に知ったもの、と様々な活動や経験の中で学び得たものが、子どもたちの心にしっかりと残っていることを感じた。

⑧ 「いのちをまもってくれているもの”を探してみよう!”第2回 保育所探検(1月22・23日)

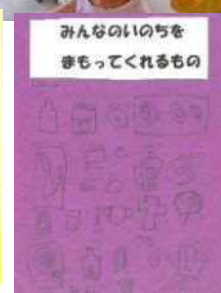


「小さいお友だちが落ちてしまわないようにプールの柵があるよね!」



「これ(電子施錠)で怖い人が入ってこれないように守っているんだね」

「来て!すごい物見つけた!」と、保育所内を走りながら見つけたものを保育者や友だちに知らせる。「職員室はいいの?」「入ってもいいか聞いてもいい?」と前回探検していない職員室について保育者に確認する。所長が快く受け入れ、普段は入ることのできない職員室に入り、緊張しながら探検する。電子施錠や防犯カメラ、SECOM等、職員室にある防災に関する話を真剣な表情で聞き取り「探検カード」に書き込む。



探検終了後、新しく見つけたものを共有した。常備灯、防犯ブザー、電子施錠、防犯カメラ等の新たな視点や、プールの柵、階段の手すり、トイレ、食べ物等広義にとらえる姿から、子どもの着眼点に変化してきている。【新たな気付き】【思いやり】

探検終了後、新しく見つけたものを共有した。常備灯、防犯ブザー、電子施錠、防犯カメラ等の新たな視点や、プールの柵、階段の手すり、トイレ、食べ物等広義にとらえる姿から、子どもの着眼点に変化してきている。【新たな気付き】【思いやり】

<保育者の思い・読み取り>

見つけたものをその場で書き残せるように、探検カードを用意した。見つけた時の子どもからの「先生、これ何?」という問い掛けに、直ぐに答えを返すのではなく、「なんだろうね、漢字では〇〇って書いてるな～」と、小さな情報を返し、子どもが自分で考えるきっかけを作り、“〇〇かもしれない!”と自分で気付き見つけた喜びを感じられるような関わりを意識した。これまでの学びから、子どもたちが“職員室にもいのちを守っているものがきっとある”と予想しているのではないかと考え、普段入ることのできない“職員室や二階も探検したい”という子どもの思いを尊重した。活動を通して、「こんなに命を守ってくれているものがあるって嬉しい、もっとあるんじゃないかと思った」と、自分たちがいろいろなものや人に守られているという実感を得たようだった。

⑨ 「消防士さんから、お返事が届いた!」(1月28日)



「お手紙のお返事まだかなあ～」と楽しみに待つこと一週間。ようやく返事が届いたことを知り、「本当にお返事くれたんだ!」と喜びの声を上げ、保育者の周りに集まり、目を輝かせる。手紙の内容を読み上げると、「熱感知器ってジリジリって鳴るんだ!」「お布団を置いているか



る。手紙の内容を読み上げると、「熱感知器ってジリジリって鳴るんだ!」「お布団を置いているか

ら押し入れに火災報知器があるんだ！」「分からないことがわかって嬉しい！」「忙しいのにいっぱい教えてくれて優しい」と分かったことを喜ぶだけでなく、返事を書いてもらえたことにも喜びを感じている。「最後に、手洗いうがいを忘れないでねって書いていたから、今日からもっと頑張る！」と意気込む姿もあった。【喜び】【社会性】

<保育者の思い・読み取り>

子どもの姿から、知りたいことが分かった喜びだけでなく、手紙の返事が届いたことを喜んでいることも感じた。保育者と消防士間のやり取りで終わってしまわず、子ども主体で作成した手紙でやり取りができたことが、コミュニケーションが制限されている子どもにとって実感しやすく良かったように思う。地域との繋がりを作るきっかけにもなった。

⑩ 「もしかして、火災報知器の点検の人来るんちゃう?!」(1月28日)



保育室に一枚の手紙が貼られていることに数人の子もたちが気付く。内容は火災報知器の点検通知書で、保育者が貼ったものだった。「なにこれ?」「漢字ばかりで分からない!」「凶鑑と同じ字やこれ、しょ・う・ぼ・うって書いてる!」「僕ちょっと漢字読めるから読んでみるわ!」と手紙の周りに集まり、知っている字を言い当て、火災報知器の点検業者が2月2日に来ることが分かった。点検業者が一年に2回しか来ないと聞いていたため、突然の情報に半信半疑になりながらも、「火災報知器の人来るの?!」と保育者へ聞く。「火災報知器の仕組みが聞ける!」「どんな点検してるか聞きたい!」と声が続き、点検の方に聞きたいことを話し合った。【文字への関心】【思考力】



<保育者の思い・読み取り>

災報知器の点検があることを直接伝えるのではなく、子どもたちが見つけやすいように点検通知を貼っておき、どこまで理解しようとするのか、子どもの可能性を見守ることにした。繰り返し、凶鑑や文庫本を読んだり、探検して火災報知器を目の当たりにしたりした経験が、文字を読み解くことに繋がっていたようだ。漢字を読めることが目的ではなく、“分かった”という経験に繋がるような関わりを意識した。

⑪ 「点検用支持棒っていうんだ!」「点検業者の方に教えてもらったよ」(2月2日)



火災報知機の点検業者が保育所に来た途端、目を輝かせて勢いよく立ち上がる。「いつもどんな点検をしているのですか?」という質問には、点検時に使用する物の中の仕組みの説明をしてもらい、点検用支持棒の先端の温かさを体感させてもらった。「熱い!」「すごい!」「こんな仕組みだったんだ!」と興味津々の子どもたち。また、保育室の火災報知器から、どんな音が鳴るのか実際に聞くこともできた。更に、保育所内の火災報知器には種類があることを教えてもらい、「何種類あるの?」「他にも聞いてみたい!」「気になる!」と発言する姿や、「棒(点検用支持棒)の先に燃料が入っているなんて思わなかった!」「真ん中の丸が光ると思っていたのに違った!」と新たな気づきに感動する姿もあった。【好奇心】



<保育者の思い・読み取り>

書籍で調べ、消防士に聞く活動を進めてきたが、専門の方に直接会って話を聞く経験や、実際に見て触り、香りを嗅いで、音を聞く“五感で感じる”経験から学ぶことはやはり大きいようだった。次は、今回の実体験にICT機器を掛け合わせることで学びを深めてみる。

⑫ 「火災報知器がこんなに頑張っているなんて!」ICTで学ぶ(2月5日)

火災報知器の種類によって音が違うということ、点検の方に教わり、「いろいろな種類があるなら、スクリーンで他の音も聞いてみたい!」という子どもの声により、火災報知器や非常ベルの聞き比べ・火災報知器がどのように作動し、いのちが助かるのかという映像を見ることにした。初めて聞く火災報知器の音に「思っていたより大きい音!」「なんだか音が少し違う!」「車で後ろに



下がるときの音みたい」と、様々なことに気付き、思い思いに発言する。火災報知器について調べていくにあたり、併せて見る機会が多かった非常ベルの実際の音を聞くと、その大きさに驚くとともに「こうやってみんなに知らせてるんだ…」「今度保育所で鳴った時は何の音か分かるようになった」と呟く。



火事が起こるが、火災報知器が発動し、いのちが助かるという映像では、「火災報知器がこんなに頑張ってくれているなんて思わなかった」と防災器具に感謝の気持ちを抱き、自分たちが守られていることを再確認している。また、火災報知器の点検の方から学んだ知識を照らし合わせ、「火災報知器の点検がどうして大切なのかがよく分かった」と話す姿もある。【学びに向かう力】【振り返り】【確認】

<保育者の思い・読み取り>

“分からない・気になる” ことについて、どうしたら良いのか考えを出し合うことを大切にしてきた。子どもの口から「スクリーンで！」と声があがるようになった姿から、生活の中でICTを用いることが浸透してきていると感じる。数日前の火災報知器の点検で実際に体験して学んだ機器が、どのように作動するのか、動く情報を通して確認し、実感して欲しいという思いでICT保育に繋がった。映像を見ることで何を感じ、気付いたか、何度も映像を止め、子どもの声に耳を傾けながら活動を進めた。活動を進めていく中で、以前は友だちの前で発表が出来なかった子どもが、今回の映像を見た後、自ら手を上げ、自分の意見を伝えようとする姿から、一連の活動の中で知識だけでなく子どもたちの心も育ち、表現の幅が広がっていることを実感する。

⑬ 「絵本、作ろうよ！」「小さいお友だちも読んでくれるよね！」(2月10日)

これまでの学んだことについて、「保育所の友だちにも火災報知器のことを教えたい！」「どうして火災報知器が沢山あるのか先生たちにも知らせたい！」と声上がる。同時に「どうやって…？」という不安も出てくる。「言葉で知らせる？」という提案もあるが、交流は難しいという保育者の声に、「話しているところを動画で撮ってスクリーンで見せる？」「字で書いて見せる？」「小さいお友だちは読めないよ」「絵だったら分かるかもしれない」と言葉が飛び交う。子どもたちの声を元に、昨年度の修了製作(大型絵本)の話をしてみると、「じゃあ、前のきく組さん(年長児)が作ってくれた大きい絵本を作って、みんなに教えてあげよう！」という声上がり、大型絵本を作ることになった。

【思いやり】【伝え合い】

<保育者の思い・読み取り>

消防署見学での学びをもとにICTを使用し興味関心が広がり、これまで学んできたことを今度は子どもたちが発信できるよう話し合う場を設け、考え合った。大型絵本の作成に不安な表情を浮かべる姿もあったが、昨年度の修了制作を手取ることで期待感へと変わっていった。

⑭ 「どんなお話にしようかな」「ものしりになったことを、みんなに教えたい！」(2月15日)



初めに、絵本でどんなことを伝えたいかを話し合った。「火をつけたままどこかへ行ったらいけないってこと！」「火災報知器がどうやって鳴るか」「火事って怖いけど、保育所にはみんなの命を守っているものがたくさんあること」「僕は普通の楽しい話がいいなあ」と、様々な思いが溢れる。「じゃあどんなお話にしようか」という保育者の問いかけに、具体的なストーリーや、こんな動物が出てきてほしい、最後は楽しくパーティーしたい等思い思いに発言する。「パンケーキが丸焦げになった絵があると分かりやすいんじゃない？」「ぞうの消防士さんで鼻から水が出るのはどう？」「なんだかワクワクしてきた！」と言葉を交わしながら取り組み、次の活動に期待感をもっている。【創意工夫】【想像力】

<保育者の思い・読み取り>

子どもたちと絵本を製作するにあたり、予想される話を保育者がいくつか考えてから、子どもたちと話し合う場を設けた。話のイメージをもちやすいように、初めに登場人物を決め、その後子どもの声をもとに詳しい内容を子どもたちと決めていった。どの発言も否定せず、子どもの言葉を明瞭化して話し合いを進めることで、子どものイメージが広がっていった。子どもたちの会話から“小さなクラスの子どもたちにも伝わるように”という言葉が繰り返し聞き取れ、在所児のいのちを守りたいという思いの強さを感じる。

⑩ 「どうやって描く？」大型絵本を作ってみよう（2月22日～）

まずは、登場人物を考えた。その消防士は、「ぞうって牙があるんだよ」という一言に「え、ないよ」「見たことあるよ！」と言葉が飛び交う。「どうかな？」という保育者の言葉に、「凶鑑を見たら良いんだ！」と、凶鑑や動物の本を持ち寄り真剣に見入る。「牙が口の下にあるんだって！」と保育者に報告し、更に

「消防士の服も調べよう！」と様々な本を開き、細部までこだわり作成する。【自然との関わり】【自己解決力】



＜保育者の思い・読み取り＞

以前は、分からないことがあると近くの保育者に直ぐに聞くことが多い子どもたちだったが、活動の中で何度も問題に直面し、解決しようとする経験をしてきたことが、自己解決力に繋がってきていることが分かる。また、動物凶鑑だけではなく、「危険動物凶鑑にも載ってるよ！」「科学の不思議凶鑑の前のページにもぞう載ってるんだよ！」と探し出す姿から、子どもの観察力に驚き、身近な物的環境がどれほど大切に改めて実感する。

⑩ 『みんなのいのちをまもるもの』できた！」大型絵本完成

完成した大型絵本！



自分たちで作成した話を画用紙に描く。細かい部分への着色に苦戦し、「こんなに細かい所、筆で塗れない」と呟く児に、「筆をこう持ったら（立てる）



出来るよ」と、考え合って取り組んでいる。こうして、クラス全員で作上げた大型絵本。修了制作として在所児にプレゼントをする前に、クラスで読むことにした。話が始めると同時に「嬉しすぎる」「何だか緊張する！」と胸を弾ませる。「これなら、火事になってもみんな無事や！」と、命をまもるものを在所児



や職員に伝えることが出来たことに、満足している。【思いやり】【達成感】【喜び】

＜保育者の思い・読み取り＞

塗りにくい所は「〇〇ちゃんが塗るの上手だったから呼んでくる！」と得意な友だちに手伝ってもらおう姿や、「顔は塗るから、服塗ってね。」と役割を決め取り組む姿から、子ども同士が個々の姿をよく把握していることが分かる。プレゼントをする前にクラスで読んだことで、「自分たちの学びを、大切な人たちに伝えたい」という思いが形となり、共有し、大きな達成感を得られたようだった。

《5歳児クラスとしての考察とまとめ》

就学前の子どもに ICT 教育保育を行う事で学びが深まるかという点について、今回の活動を通して、子どもの学びに繋がり、より深い理解と好奇心を生み出す事ができたと考える。

今回5歳児クラスでは、“主体的な行動から学びが深まる保育”をテーマとして取り組んできた。子どもたちが自らの興味や好奇心によって行動し、知り得たことから次の興味や好奇心を発見できるよう、保育者は見守りながら、環境を整えてきた。このテーマに基づき活動を行なっていく中で、ICT教育保育によって子どもたちの好奇心や理解がより深まった事例が多く見受けられた。

1つ目は、消防署見学の後、消防士に直接説明を受けたが、動作する所を見る事が出来なかった防災用具（散水ホースやエンジンカッター）の映像を ICT を用いて見た事である。子どもたちは実体験で不足していた情報を映像で見ることによって、情報を追加し物事の理解を深めていった。

2つ目として、火災報知器の映像を見た子どもたちが目を輝かせて探検に出かけた瞬間である。映像の中に存在する火災報知器が、子どもたちの身近な保育所に存在するのかという強い好奇心となり自発的な行動に繋がった。

3つ目は、子どもたちが書いた手紙が消防士に届いたことを ICT を用いて映像で確認した事である。子どもたちが行動した結果が映像という形で見て確認した事で、より実感を持つ事が出来た。

最後に、これらの継続した活動から、子どもたちの姿に更に主体性や表現力が生まれた事だ。これまで
は、“わからないこと”に向き合おうとする前に保育者に答えを求め、保育者の指示を待っていた。しかし
ICT 教育保育から広がる活動を積み上げ、数々の“わからないこと”にぶつかることで、次第に諦めずに疑問
間に向き合うようになり、試行錯誤を重ね、分かった時の喜びを味わう姿に大きく変化した。更に、言葉や
絵画、身体表現等の自己表現の可能性も徐々に広がっていった。

以上の点から、ICT 教育保育と実体験を組み合わせる事でより学びの効果が得られると同時に、実体験と
ICT どちらか一方で得られる理解や関心よりも、深く広い理解と好奇心に繋がるということが分かった。保
育者は明確なねらいをもち、ICT 機器を“見るだけ”に留まってしまわないよう、見る活動の前後に重点
を置き、コミュニケーションツールになることを理解する事が大切であると考えます。

昨今の新型コロナウイルス感染症の影響さえなければ、実際に体験できたのに…と子どもにも悔しさ
があることを感じる事が沢山あった。しかし、この状況であるからこそ、保育者が ICT 教育保育と向き合
うきっかけになり、ICT ならではの良さに気付くことが出来たことも事実だ。実体験を得る機会が減少して
いる今だからこそ、子どもの好奇心に寄り添い、様々な環境を取り入れていくことで、科学する心が育っ
ていくのではないかと考える。

IV 「科学する心」の育ちと今後の可能性

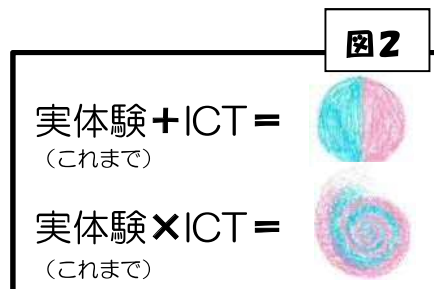
今年度は、新型コロナウイルス感染拡大のため、私たちを取り巻く生活環境に大きな変化が起こり、多
くの制約や新しい生活様式に沿うための努力を強いられ、子どもたちも多くのストレスや見えない不安を
抱きながら過ごした。しかし通常保育が再開された時に感じたことは、そのような毎日の中でも子どもた
ちの好奇心や探求心は育ち続けているということである。“何か面白いことはないかな？”と草木や生き
物を探す姿、初めて知った事を報告する時の喜びの表情等、子どもの心は常に周りの物・事柄に対して向
けられていることを感じた。

4歳児は経験できなくなった活動（行事・散歩等）から始まったリモート交流であった。“互いの顔が
見えた”ことを楽しいだけで終わらず、気持ちが持続し新たな活動に発展したことは、子どもたちに芽生
えた“会いたい”という気持ちや相手から受ける刺激によるものではないかと考える。保育者はリモート
毎にその前後の活動のねらいや内容を様々な分野（数や文字に対する興味・制作・社会や地域への関心
・遊び等）に関連して取り入れることによって、子どもの社会性や創造性、共通認識、仲間への意識等を
育てることに配慮した。子どもたちの“もっと相手を知りたい”という気持ちに寄り添いながら活動に
取り組んだことで、次のリモートに期待を持つことができた。相手に思いを馳せ、心が育つ経験は、今
後の人間関係の構築やコミュニケーション力、創造力の育ちに大いに繋がっていくであろう。

5歳児の活動では、実際に見ることができなかった事柄を映像で見たことをきっかけに、知りたい気持
ちが高まり、暮らしに関わる人々や身の回りの物への興味、命を守るものへの探求、そして周囲の人や年
少児への思いやりへと深まった。保育者が子どもの“心が動く瞬間”を実感できた時、保育者自身も教育
保育の方向性や目的・ねらいが明確になった。自分が見つけた機器を、文字や絵を用いて書き留め作成し
た「探検カード」など、子どもがもつ知識や経験を活動に取り入れることで意欲や達成感が得られたと考
える。疑問点や実際に経験ができない部分は ICT を使用し理解・認識できたことで興味がさらに深まり、
活動の可能性が広がったことで、“もっと知りたい”“じゃあ次は〇〇してみたい”と主体性が表れ、皆
の前で思いを発言できるようになるなど、自信や自己肯定感に繋がった。

各クラス、ICT の活用については、年度当初の計画よりもさらに多岐
にわたる取り組みができた。その理由として、保育者が子どもの気持ち
を読み取り、行動の要因や興味・関心事を考察し、保育のねらいを深め
る意識をもつようになったこと、また、そのための ICT の使用法を考
えるようになったことである。当初は ICT 活動そのものに意識が向け
られ、後の活動に繋がりが見られない場合が多かった。**保育+ICT**

しかし、今年度は保育者が活動に必要な内容を理解し取り入れた ICT であった。さらに保育者自身も予想
しなかった方向へ展開した活動や、子どもと一緒にさらなる活動が見出せた場面を見ると、子どもの気づ
きや疑問・探求心と ICT を組み合わせることは、新たな「科学する心」の誕生や新たな教育保育の可能性
という相乗効果につながると実感した。**保育×ICT** (図 2)



ICTは視覚優位な分野ではあるが、実体験と組み合わせることによって他の感覚（五感）の育ちも促されていくため、総合的な子どもの成長を捉える中でのツールの一つであると考えていきたい。まだまだ日々の中には新たなICTの活用法がある。今後も子どもの姿や内面を丁寧に読み取り、振り返りを次の活動へ繋げていくことを大切にしながら、一人一人の小さな「科学する心」の芽生えに気づき、寄り添い、育んでいきたい。（図3）

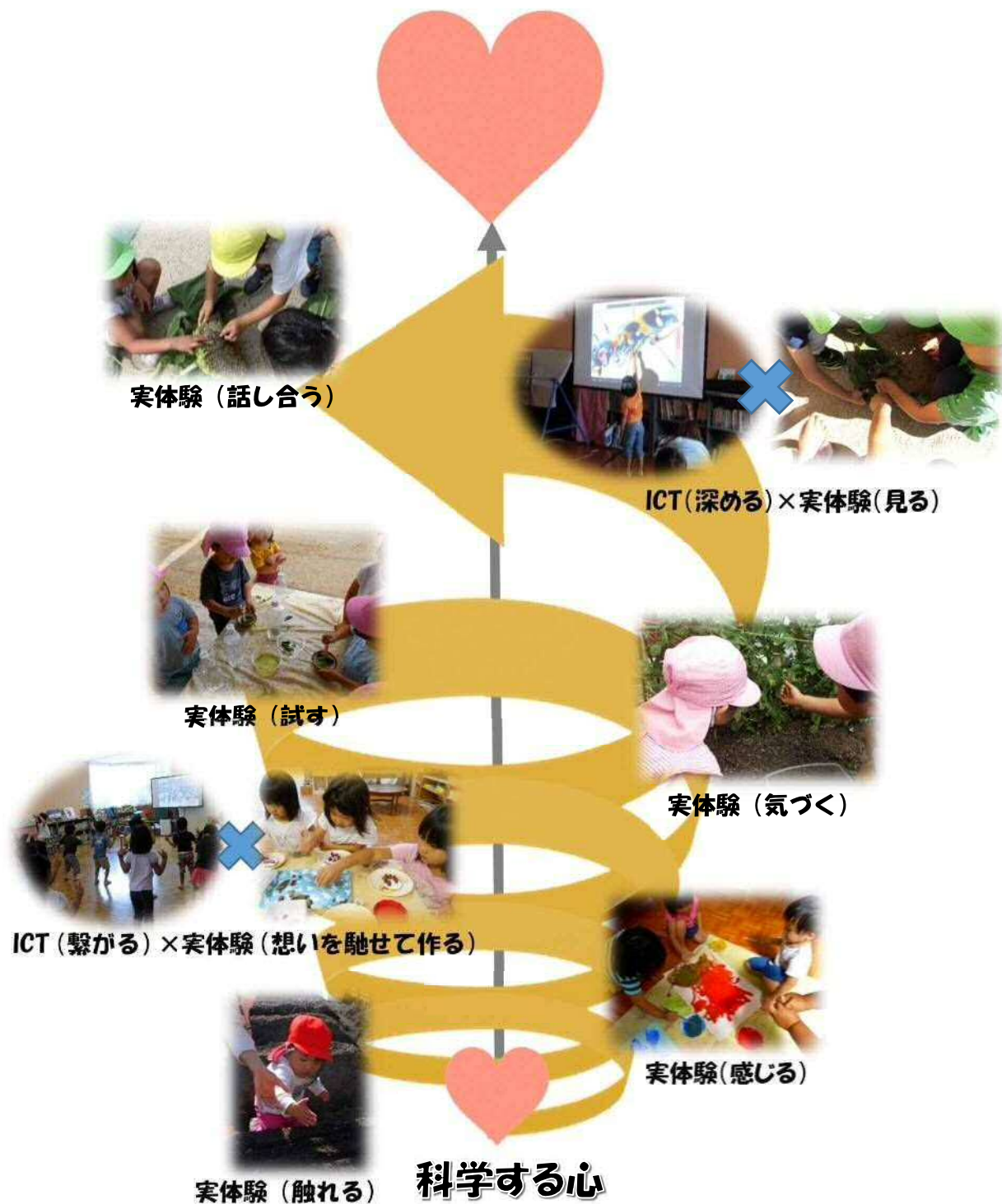


図3 「科学する心」と保育の可能性の繋がり

研究代表者名

原田 晴子

執筆者名

近藤 千恵, 田中 愛子, 楠間 可菜, 中尾 知香, 吉田 真菜